

—

このところ、過去のある文字組織がどのように作られ変化したかという文字の興亡に関心をよせている。そこで今回は、パスパ文字を例として文字の変化ということについて考えてみた。同一の文字組織を用いて多くの言語を表記するばあい、言語に応じて文字はどのように変化するかということに関わってくる。

パスパ文字 **ᠠ**n と **ᠢ**i は、字形の一部（屈曲した部分が閉じているのが **ᠠ**n、開いているのが **ᠢ**i）が混同されるばあいがある。その状況は以下のとおり。

碑文：パスパ字モンゴル語資料¹⁾では「§ 10. 普顔篤皇帝虎年(1314)聖旨(4)」や「§ 16. 妥懽帖寧皇鼠年(1336)聖旨」の n に、**ᠠ**と**ᠢ**の両者がみられる。パスパ字漢語資料²⁾では「奉元路大重陽萬寿宮聖旨(二)」の n(音節末尾)に、**ᠠ**と**ᠢ**の両者がみられる。しかしながら、おおむね n は「閉じた **ᠠ**」であり、i は「開いた **ᠢ**」となる。

刊本：パスパ字モンゴル語資料¹⁾には「§ 35. 《薩迦格言》残頁(1)(2)(3)(4)」、「§ 36. 天理大学存刻印本残頁」がある。これらは恐らく元代の残葉であろう。「閉じた **ᠠ**」と「開いた **ᠢ**」の混同はみられない。パスパ字漢語資料には「百家姓」³⁾、「大元累授臨川郡吳文正公宣勅」⁴⁾、「元世祖勅書」⁴⁾がある。「百家姓」は、南宋末年の陳元靚編『事林廣記』の増補版・元至順刊本(1330-1333年)、いわゆる故宮本に納められているものを見ることができる。森田憲司(1993)⁵⁾によると、至順刊本は現存最古の刊本であるけれども、その前に至元刊本(1264-1294年)の存在を想定することができるという。パスパ文字の公布は1269年であるから至元刊本に既にパスパ字「百家姓」が増補されていた可能性はある。また至順刊本にも幾つか異なる版本があるらしい。どうも、至順年間の故宮本「百家姓」は重刻部分であるかもしれない。次ぎに「大元累授臨川郡吳文正公宣勅」と「元世祖勅書」であるが、神田喜一郎(1969)によると、「大元累授臨川郡吳文正公宣勅」は吳文正の孫が明の永樂四年(1406年)に刊行したもので、パスパ文字の宣勅は原本のままの姿ではないという。また「元世祖勅書」は福建の禪寺に伝わっていたものを模刻し明代の詩集『汗漫唸』に附録として付したものである。これらは「閉じた **ᠠ**」と「開いた **ᠢ**」が混同する。

以上によると、問題のパスパ文字の字形につき、パスパ字漢語の刊本資料に著しい混同が見られる。もっとも、これらはいずれも原本ではなく重刻のようである。その上、三つの資料のうち二つは正式にはパスパ文字の伝統が途絶えた元代以降の刊行ということになる。重刻のため、或いは後代の重刻のため誤りが生じたということであろうか。これはいわば言語外の要因と言えよう。このような言語外の要因は重要であるけれども、

実はそれだけでなく、パスパ字漢語の文字用法自体に「閉じたᠠ」と「開いたᠠ」の混同を誘う因が含まれているとも考えられる。以下にそのことを述べる。

二

ᠠnは音節初頭と音節末で字形は同じになる。一方、ᠠiは音節初頭と音節中・末で字形が異なる(表1のパスパ字モンゴル語参照)。この両者は、音節初頭では僅かな違い(屈曲した部分が閉じているかᠠ、開いているかᠠ)であり、音節中・音節末では上記以外の文字成分(横線が有るのがᠠn、無いのがᠠi)により比較的大きな違いとなる。

さて、パスパ字モンゴル語では音節初頭においてᠠnとᠠiとが対立し、僅かな字形上の相違(屈曲した部分が閉じているかᠠ、開いているかᠠ)が重要となる。一方、パスパ字漢語では音節初頭において両者が対立しない。すなわち、音節初頭にᠠiは現れず、必ず前に何らかの子音文字を伴って表記される。そのため、漢語にとって、この僅かな字形上の違い(屈曲した部分が閉じているかᠠ、開いているかᠠ)は重要な弁別特徴とはならず、上の横線の有無が両者を区別する分かりやすい特徴となる。

パスパ字モンゴル語			パスパ字漢語		
	n	i		n	i
初	ᠠ	ᠠ	初	ᠠ	無
中	無	ᠠ	中	無	ᠠ
末	ᠠ	ᠠ	末	ᠠ	ᠠ

表1

三

その結果、石に刻した碑文に比べ、規範意識が薄れ易い刊本や写本において、漢語では両者の相違(屈曲した部分が閉じているかᠠ、開いているかᠠ)が軽視される傾向が生じた。これと重刻(三つの資料のうち二つは正式にはパスパ文字の伝統が途絶えた元代以降の刊行)であるという悪条件とが相まって、パスパ文字の字形の混同に拍車がかかったものと想像する。

注

- 1) 照那斯图(1991)『八思巴字和蒙古語文献 II 文献彙集』AA 研、1991年。
- 2) 羅常培/蔡美彪(1959)『八思巴字與元代漢語』科学出版社、1959年。
- 3) 『事林広記』京都市：中文出版社、1988年。
- 4) 神田喜一郎(1969)「八思巴文字の新資料」『東洋学文献叢説』二玄社、1969年、73-110頁。
- 5) 森田憲司(1993)「『事林広記』の諸版本について—国内所蔵の諸本を中心に—」『宋代の知識人—思想・制度・地域社会』汲古書院、1993年、287-318頁。